

小学生の時にアメリカから編入したある生徒は、啓明学園でそれなりにがんばってはいましたが、高校生になって姉妹校との交換留学でアメリカのハイスクールに行ったところ、水を得た魚のように力を発揮しました。そこで、留学終了後改めてその学校に入学し、アメリカの大学に進学することにしました。啓明学園にいる間、帰国生の英語クラスで、次々と編入してくる英語を話す友達と一緒に力をつけていたことが役に立ちました。彼の場合は、アメリカで生まれたためアメリカ国籍もあり、ビザの問題で悩まされることがなかったのも幸いでした。

逆に、日本で生まれた外国籍の生徒もいます。ある女の子は、日本生まれの日本育ちで英語はあまりできませんでした。しかし、見かけは黒人なので、英語で話しかけられたり、「日本語が上手ですね」とほめられたりすることがありました。そんなときは「変な気持ちがある」と言っていました。この子は、中学生になるときに一念発起して英語の勉強に励み、最終的にはインターナショナルスクールに移って英語で勉強を続ける道を選びました。

日本人のお父さんとボスニア人のお母さんがドイツで出会って結婚しドイツ語で暮らしていたが、お父さんの仕事の関係で日本に住むことになったというような複雑な場合もあります。このような生徒にとっては、いろいろな文化や言語の背景を持つ生徒たちが集まる学校は、特別な目で見られることのない生活しやすい環境だと思われます。自分のアイデンティティーの問題で悩んだりしたとき、それを理解してくれる仲間や大人がいることも心強いにちがいありません。

啓明学園には李選手のような在日韓国・朝鮮人の家庭の生徒たちもいます。そのほとんどが「通称名」ではなく戸籍上の名前で生活しています。公立学校から移って来たのを機会に通称名を使うのをやめた生徒もいます。自分の名前を使うことに何一つ遠慮する必要がないのは、当たり前のことですが、日本の社会の中ではまだまだ難しい場合があるようです。李選手の活躍は、このような状態を改善するためのひとつの力となるという意味でも大きな価値があります。

いろいろな背景を持つ生徒たちと暮らす環境にいと、日本生まれで日本育ちの生徒たちも、そのことがたくさんの育ち方の中の一つに過ぎないことを自然に理解します。彼らが、身近なところにもある差別や偏見を少しずつなくしていくことを期待したいと思います。沖縄の基地、尖閣諸島、北方領土など、日本は国際的な難しい問題をいくつもかかえています。このような人たちは、それらに新しい角度から光を当てることができるかもしれません。



◆ 生まれた国、育った国、家族の国

私の娘は、ドイツのハンブルクで生まれましたが、2歳の時に「帰国」したので、ドイツで生活した記憶はありません。しかし、自分が生まれた国ということで、親しみを感じているようです。最近一人でドイツ旅行をした時には「里帰り」と表現していました。憶えてはいなくても、自分が生まれた国だという事実から「帰る」という感覚が生まれたのでしょうか。

日本から海外に行った子どもたちにとっては、今住んでいる国も日本も共に「私の国」です。李選手にとっての韓国のように親や家族の出身国があれば、たとえ住んだことがなくてもその国も「私の国」と言えるでしょう。いくつもの「私の国」があることは、時として悩みの原因にもなりますが、世界にいくつも「帰る」場所を持っていることになるのですから、幸せなことにちがいありません。

啓明学園の国際学級の様子、英語スピーチコンテスト、日本語スピーチ「私のメッセージ」を収録したDVDをプレゼントいたします。ご希望の方は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までご連絡ください。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター

〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15

TEL : 042-541-1003

HP : www.keimei.ac.jp E-mail : kokusai_info@keimei.ac.jp



住む「国」を移ったり、「国籍」を変えたりする人達が、世界中で増えてきています。人々の移動が、グローバル社会の源です。「海外子女」「帰国子女」はその代表で、これからの社会の希望です。その子ども達自身のために彼らの「宝」をさらに伸ばすこと、社会のために彼らの体験を生かすことが、不可欠です。